

なぜ MH17 は、10 機もの航空機が撃墜された戦闘地域を飛んでいたか？

July 18, 2014

RT: by Tony Gostling (最初、航空産業で働き、次に BBC の訓練を受け、現在、英国の土地権活動家、歴史家、調査ラジオ・ジャーナリスト)



かりにあなたが、木曜日の朝、アムステルダムからクアラルンプールへの 12 時間の旅のために、マレーシア航空便に搭乗しようとしていた乗客だったとしてみよう。

それ以前のマレーシア航空便の謎の失踪事件のことを考えれば、「もし我々が消えたら、これがその飛行機の外観ですからね」などと冗談を言いながら、少しナーバスになっていた搭乗者は、たぶん彼一人ではなかつただろうと想像される。

座席に坐り、前の動く地図の画面を見ながら、あなたはおそらく「ウクライナ」という文字

が、スクリーンの右端を通り抜けるのを見たであろう。あなたは少し不安にならないだろうか——もし、かなり多くの飛行機が、最近そのあたりで吹き飛ばされたこと、つまりそこで戦争が起こっていることを、知っていたとしたら？

David Cenciotti のブログ “Aviationist” を調べてみれば、ここ数週で 10 機の航空機が東ウクライナで撃墜されていることを知るだろう。7 月 8 日には、最後の輸送機となった Il-76 が、ルガンスクで撃ち落とされ、それ以来、ウクライナ国家航空局は、民間機に対して無期限に彼らの領空を閉鎖した。にもかかわらず、なぜ空路統制管制官は、より高い高度で東ウクライナ領空を飛ぶように、飛行機を誘導し続けたのだろうか？

あと知恵では何とでも言えるとはいえ、もし私が、過去一か月のウクライナ上空の、何百という飛行機の一つに乗っていたとしたら、キャビンのスタッフの誰かの袖を引きたい誘惑にかられたことだろう——そして不躰に機長から直に、これほど多く航空機が最近撃ち落とされた空域を、我々は通らないという保証を取り付けようとしただろう。

ところで飛行機はそこで何をしていたのか？

マレーシア航空からすぐ返ってきたのは、ウクライナの戦闘領域は飛んでも“安全”という保障を、国連の国際民間航空組織（ICAO）から得ていたという返事だった。これはあのアイスランドの Eyjafjallajökull の“火山灰の雲”が漂っていたほとんど一週間、ヨーロッパと北大西洋の空を閉鎖した、あの同じ機関だったのだろうか？ あのと時、ほぼ 1 千万の旅客の飛行がキャンセルされた。にもかかわらず、彼らは、地対空ミサイルが飛び交っているとわかっている戦争ゾーンを閉鎖し忘れていた。

私は、ICAO の地域指揮官 Luis Fonseca de Almeida が、辞職して進んで裁判を受ける前に、すべての犠牲者の家族に個人的に謝罪してほしいと思う。もちろんこれが、おろそかで頼りない、そこに任命されている人々が独立心をもって仕事に当たるといふより、どうにでも動く手先のように見える、国連や他の地球的統制機関の、唯一の部門ではない。またマレーシアの諸官庁が、我々を利用しようとするかもしれない国際機関からの助言に、あまり頼り過ぎないように警告する同業者の声に、耳を傾けるようお願いしたいものだ。

誰の仕業かを言うなら、この射撃が、ウクライナの分離主義者によるランダムな射撃だったというようなことはありそうにない。そんなことをしても、彼らは何の得にもならず、その行為によってますます孤立するだけだからである。また彼らが、これまで使われていたらしいどんな兵器より格段に進んだ、この種の兵器を利用できるかどうか疑問である。多分これが、ICAO やマレーシア航空が、3 万フィートの高さを飛ぶ飛行機には、肩を発射台とする

ミサイルは届かないと考えた理由であろう。

BBC テレビの *Newsnight* に出た兵器専門家の **Doug Richardson** は、航空機の飛ぶ比較的高い高度には、1970年代に開発され、汚い仕事をした、旧ソ連の Buk ミサイルと考えられるものを「避ける方法はない」と言った。



すれ違うロシア大統領機に向けて発射された？

それにもう一つ、MH17の撃墜が、ロシア大統領ウラジミール・プーチンその人の近くで起こったという事実がある。プーチンはたまたま、西から東へ向かって、ブラジルからの帰国途上にあつた。ロシアの *Air Force One* (米大統領機) に当たる *Ilyushin-95 'Board One'* (ロ大統領機) は、時間にしておよそ半時間、距離にして 200 マイル (320 km)、このマレーシア機より遅れて飛んでおり、この運命のジェット機がウクライナ領空 (大統領機は避けた) に入った直後に、ワルシャワ近くを通過していた。

西側諸国の反ロシア制裁が力を失い、彼らの支持するキエフ政府が人気を失いつつある現在、これは NATO の攻撃動機を示すものかもしれない。もしそうなれば、この種の大胆な挙動は、西側の権力エリートによる、英国の新外相 **Philip Hammond** と国防相 **Michael Fallon** の、早々の忠誠度テストにもなるかもしれない。その場合、メッセージは「君たち、この問題について独自に決断するというような、面倒な考えを起こさないように注意したまえ」というものだ。

攻撃のタイミングもまた人の注意を引く——それはプーチンが、中国大統領・習近平とともに、ブラジルの都市 *Fortaleza* において、「BRICS 世界開発銀行」を創設するためにサイン

をした、歴史的合意のあった翌日のことだった。1944年のBretton Woods（ブレトン・ウッズ協定）以来の、「世界銀行」のいかがわしい独占体制への、間違いなく最大の挑戦が、現実には、ブラジル、ロシア、インド、中国、それに南アフリカによって、水曜日（事件前日）に調印されたのだった。

自分が死ぬ日まで、どこまでも多くのカネを追及することに生涯を費やす人々の強迫病的性格を見つめている者には、あるショッキングな最近の歴史事件がある。それは国家やそのリーダーが、石油ドルの地球的独占、また世界銀行やIMFの独裁にあえて逆らう、あるどうしようもない終末に直面していることである。

イラクの大統領サダム・フセインは、彼が2000年11月に、ドルでなくユーロで取引するある株取引所、すなわちオイル取引所を設立する準備を始めたとき、どんな運命が彼を待っているかを知らなかった。それから2年半後に、存在しない大量破壊兵器が彼の国で“発見”され、爆弾が雨のように降ってきた。サダムと彼の同胞たちは、ブッシュ及びブレア氏の命令のもとに、不法に侵略された。そして国家は、いま中東全体に疫病のように広がり、そこから抜け出せそうにない、あの地獄の混とん状態に落ち込んでいった。

同様に、負債のなかったリビアのガダフィ大佐と彼のシャトル外交が、アフリカのリーダーたちからの十分な合意を得て、アフリカの準備通貨、アフリカ金ディナールの創造を通告したとき、彼は「自国民を爆撃している」というねつ造された非難を受けて、国連安保理の前に立たされていた。2011年5月1日、ロンドンでウィリアム皇子とケート妃の結婚式のあった週末、ガダフィの息子の一人と3人の孫が空爆で吹き飛ばされ、NATOはこの国を爆撃し始めた。その結果、アフリカ大陸で子供の死亡率の最も低かった国が、石器時代へと逆戻りした。

国連は地上部隊を禁止していたが、傭兵が送り込まれ、10月21日、ガダフィは背中に銃剣を突き刺されて、ついに処刑された。この当時、無拘束のIMFやその友人の有り余る腕力にまかせて軍がやりたい放題をやっているあいだ、西側の諸政府は、関係のないサイドショーをやっていたように見える。



なぜマレーシア航空便なのか？

これと3月のMH370便機の“失踪”が、ともに不幸にもマレーシア航空のジェット機に起こったことは、本当に純粋な偶然なのだろうか？ どちらも“事故”だったようには見えない。では両方とも攻撃行為、マレーシアに対する戦争行為だったのだろうか？ だとしたらなぜ？ そして誰の仕業なのか？

マレーシアは、東と西に引き裂かれた純粋に独立した国家である。ウクライナや他の多くの中サイズの独立国家のように、マレーシアは独立を保つことが非常に難しい状態にある。世界が少しずつ、資本主義の崩壊によって、巨大な世界戦争になりそうな気配を見せているときに、小さい、あるいは中サイズの国家は、独立を保つことがますます不可能になりつつある。そこで、そうその通り、マレーシアの指導部に対して、こちらに付けという圧力があつた可能性があり、これはおそらく、彼らへの脅しと強制の試みだったかもしれない。

誰も経済的崩壊を望む者はなく、世界戦争を望む者もない。これを繰り返すのは慰めになるが、支配エリートがこの2つの栗を“二重の呪い” (double whammy) として展開するのは、これが初めてではなかろう。墜落事故からひと儲けするのは、それを見ていれば、簡単なことであろう。それはまた神々への古風な「人身御供」にもなり、戦争は、自分たちを閉じ込めようと考えているかもしれない、あらゆる者たちの注意をそらす最上の方法である。見ようとする勇気のある者には、9・11攻撃によって、アメリカがおそらくドルの力の衰退を食止めるために、彼らのすでに崩壊しかかった軍事力を、建て直そうと決意した証拠は明らかである。

「戦争に反対するイラク退役軍人会」の Jimmy Massey 二等軍曹が、ベネズエラ国家テレビのインタビューに答えて言ったように、「ルールはない、これは第三次大戦だ、ルール・

ブックは [2001年] 9月11日に窓から捨てられた。」

米海兵隊諜報部の聴取に常に出席していた経験をもつジミーは、西側の一般人やメディアや政治家よりも、ホワイトハウスやペンタゴンのミッション系統の秘匿政策が、どれほど深くにまで及んでいるかを知る立場にあった。

ヨーロッパと北アメリカ諸国が、気付いたときすでに遅かったことは、厳密な交換統制を守ることによってのみ、自分たちが主権国家でいられることだった。それを守らないと、国際金融資本は、無際限の力をもって、彼らの邪魔をする——メディアから国会に至るまで——すべてのものを破壊するために割って入るだろう。それに抵抗できるものは何もない。今では裁判所までがついに、税金を免れる国際企業の特典にあずかれるようになっている——秘密交渉による「大西洋間貿易と投資パートナーシップ」(TTIP) が今年の後半に調印されれば。

そうなれば裁判所は彼らのものとなり、企業の気に入らないどんな議会決議をも覆すことができ、彼らは大量の現金を蓄えていて、自分たちが勝てるように、世界の最上級の弁護士を抱えている。



飛行機を撃ち落としてくれる人には事欠かない

英国の慈善団体 War On Want は、西側における戦争の私物化とともに、「市民の無差別殺戮や拷問をはじめとする、繰り返される人権の蹂躪が、傭兵たちによって行われている。責

任も取らず規制もされないで、これらの会社は世界中で、人権蹂躪の共犯者となっており、人々よりも利益を優先させ、戦争の炎を煽っている」と指摘している。

そこでもしあなたが誰かに核戦争を戦わせ、大量虐殺をやらせ、飛行機を撃ち落とさせたければ、きょう日、あなたは自由市場で、そうした仕事をしてくれる者たちを買うことができる。9・11以来、私的な軍事会社の蔓延によって、軍産複合体にとっては、とても便利な世の中になった——ありがたいことに！

しかしどのようにしてこの世界が、このような会社が国家の保護と仕事をもらえるような状態にまで達したのかは、全く想像することもできない。

問題は再び、地球的な巨大銀行業であり、彼らが情報サービスや国際医薬品カルテルと一体になっていることは、法廷で何度も明らかになっている。ドラッグが一方へ、銃が他方へ飛ぶイラン・コントラにしても、HSBC ホールディングスのマネー・ロンダリングに対する2012年の、わずか20億ドルの科料にしても、彼らは単に、法を超越した犯罪者だというだけではない、彼らは今自分たちの私的な利益のために、法を作っているのである。

彼らがコントロールしようとしているのは、自分たちを監視している、アジア、太平洋、南米諸国のブロックだけではない。彼らが生きるために依存している自国民をもコントロールしようとしている。彼らがうまく逃げおおせたと思っている、あらゆる悪行をもって、彼らは自分の体を塗りたて、自らを苦境に追いつめている——彼らがコントロールしようとした大西洋間建造物が、足元から崩れ落ちていくとともに。